

⑱母子・小児系 1

(小児科)

1. 研修目標

基本研修カリキュラムで医師としての基本的な知識、技術や態度を修得した研修医のうち、さらに小児医療の研鑽を志す研修医に対し、小児医療に必要な更なる知識・技能の修得並びに全人的医療を行う医師としての充実を目指す。

2. 研究指導体制

(1) 病棟

主治医の一員として指導医とともに、責任をもって入院患者を受け持ち、その診療にあたる。

(2) 外来

指導医の下、外来患者の医療面接及び診療の実際を学ぶ。

指導医との討論を通じて鑑別診断及び治療法について修得する。

(3) 当直

週1回程度の当直（急患センターを含む。）を指導医とともに経験し、小児救急患者の診療を学ぶ。

(4) 発表

週1回の診療討議会で、受持ち患者の報告とそれについての考察を行う。

さらに、臨床データの解析方法やまとめ方を学び、小児科地方会及び小児科学会並びにその分科会において発表を行うとともに、臨床論文として医学雑誌に投稿する。

3. 研修指導責任者 森内 浩幸

4. 研修内容

主治医の一員として、必修カリキュラムで経験できなかった研修項目を重点的に適切な小児医療を行うために必要な知識・技能を広く、かつ、より深く研修する。

5. 研修到達目標

5-1 行動目標

基本研修カリキュラムで修得した基本的行動目標を下に、社会が求める小児医療の役割、特異性を理解する。

5-2 経験目標

(1) 小児の特性を学ぶ

- a. 病棟研修において、小児の疾患の特性を知り、病児の不安・不満の在り方をともに感じ、病児の心理的状态を考慮した治療計画をたてる。
- b. 外来研修により、子どもの病気に対する母親の心配の在り方を受けとめる対処法を学び、育児及び育児不安・育児不満についての対応法、育児支援の実際を学ぶ。
- c. 成長、発達過程にある小児の診療のためには、正常小児の成長、発達に関する知識が不可欠である。その目的達成のため、一般診療に加えて正常新生児の診察や乳幼児検健診などを経験する。
- d. 正常児について、出生から新生児期の生理的変動を観察し記録する。
- e. 夜間小児救急を訪れる病児の疾患の特性を知り、対処方法及び保護者（母親）の心理状態を理解することの重要性を学ぶ。

(2) 小児の診療の特性を学ぶ

- a. 小児科の対象年齢は新生児期から思春期まで幅広い。小児の診療の方法は、年齢によって大きく異なり、とくに乳幼児では症状を的確に訴えることができない。しかし、養育者（母親）は、子どもが小さければ小さいほど、長時間子どもとともに、生活しており母親の観察はきわめて的確である。そこで医療面接において

は、母親の観察や訴えの詳細に十分に耳を傾け、問題の本質を探し出すことを学ぶ。

- b. 母親との医療面接においては、まず、信頼関係を構築し、その上にたったコミュニケーションが重要である。また、診察においては、子どもの発達の具合に応じて変える必要があり、とくに診察行為についての理解に乏しい乳幼児の協力を得るため、子どもをあやすなどの行為が必要となる。理学的所見の取り方については、乳幼児で最も嫌がる口腔内診察を最後に回すなどの年齢に応じた配慮が重要である。このような小児科診療の特異性を身につける。
- c. 乳幼児は、検査値や画像診断に先行して診療者の観察と判断がなによりも重要であることから、病児の観察から病態を推察する『初期印象診断』の経験を蓄積する。
- d. 成長の段階により小児薬用量、補液量は大きく変動する。このために小児薬用量の考え方、補液量の計算法について学ぶ。また、小児期に頻用される検査の正常値の範囲も成人とは異なることから、小児薬用量、補液量、検査値に関する知識の修得、乳幼児の検査に不可欠な鎮静法、診療の基本でもある採血や血管確保などを経験する。

(3) 小児期の疾患の特性を学ぶ

- a. 小児疾患の特性のひとつは、発達段階によって疾患内容が異なることである。したがって同じ症候でも鑑別する疾患が年齢により異なることを学ぶ。
- b. 小児疾患は、成人と病名は同一でも病態は異なることが多く、小児特有の病態を理解し、病態に応じた治療計画を立てることを学ぶ。
- c. 成人にはない小児特有の疾患、染色体異常症、種々の先天性異常症（代謝異常症、免疫不全症など）、各発達段階に特有の疾患などを学ぶ。
- d. 小児期には感染症の中でもとくにウイルス感染症の頻度が高い、熱型や発疹の特徴から病原体の推定を行い、その病原体の同定法、同定の手順、管理の方法、治療法について学ぶ。
- e. 細菌感染症も感染病巣（臓器）と病原体との関係に年齢的特徴があることを学ぶ。
- f. 新生児、未熟児医療は、小児医療の中でも特殊な領域であるが、「総合診療科としての小児科」の研修の中では必ず研修をすべきものである。新生児・未熟児の生理的変動について学び、生理的変動領域を越えた異常状態の把握の仕方を学ぶ。また、プレネータル・ヴィジットについても理解する。超未熟児・極小未熟児のフォローアップを通して、出生早期の医療の重要性と未熟児出生の予防について学ぶ。

